

**生活支援体制づくり協議体（地域包括支援センター天竜
担当圏域レベル）開催報告書**

1 開催日時	令和 7年 12月 1日（月） 13時30分 ～ 15時00分
2 開催場所	天竜保健福祉センター
3 参加者	26名 (委員15名、事務局5名、関係機関6名)
4 協議内容	<p>1 開会</p> <p>2 挨拶 浜松市高齢者福祉課 大石課長補佐</p> <p>3 情報交換・意見交換（グループワーク） ワールドカフェ形式により3グループに分かれ、3つのテーマについて意見交換を行った。</p> <p>(主な意見など)</p> <p>テーマ1「中学生や高校生を含めて、地域の問題に関心を持ってもらうきっかけをつくるには？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校がなくなるのは問題。小中一貫校など作られると良いのでは。 ・住んでいる地域と学んでいる地域の違いもある。問題、課題も違うのではないか。 ・そもそも住んでいる地域に中高生がいない。関わりのない地域の事を考えるのは難しい。地域主導で生徒を受け入れる課外授業などが必要。地域の文化、交流を通じてうまくマッチング出来れば良い。 ・地域全体としたらどんな活動や交流が考えられるか？ →共通性のあるもの、スマホ、農作業の手伝い ・民生委員の密着取材はどうか？ 何をやっている人なのか？興味を持って仕事探訪してもらう。 ・(清竜中) 中学生向けの未来授業では地域の方や団体の講演を実施。 生徒たちにそれぞれの地区の取材をしてもらったらどうか？ ・本田宗一郎さんのミュージカル→親が地域の事を伝える機会。 ・(下阿多古小) 学校の田んぼで作ったお米をきこころで販売している。 ・子ども達に未来の事を考えてもらう。希望やどんな未来が作れるか？ ・自治会の行事と一緒に活動できれば交流につながる。(防災、祭り) 準備段階から関わる意識が向く。 ・世代交流は楽しい。 ・認知症講座でも世代間交流が出来た。 ・(上阿多古) 小中学生も参加するボッチャ大会 ・自治会の防災訓練へ中高生の参加促し。 ・コンサートの司会や道具の出し入れを高校のボランティア部にお願いしている。一緒に会を作り上げる体験、一体感。 ・声掛けが出来る人を増やしていく。 ・子ども会と自治会のコラボ。

- ・学校の課外授業。子どもは全員参加できる。

テーマ2 「地域の助けあい活動などを、ちょっと頼んでみようかなと
思えるきっかけをつくるには？」

- ・お互いさまの関係→若い世代も頼みやすい。
- ・子育て、共働きだと自分の家の事が回らない。草刈りなど
- ・話し合いの中でニーズを拾う。
- ・一緒に出来るような仕組み「手伝ってくれる人」
- ・誰かと一緒に参加する。
- ・有償であれば頼みやすい。
- ・お金を払ってゴミ収集車に家の前に来てもらう。
- ・歩いていける範囲内に使える資源があれば。
- ・地元の団体であれば頼みやすい。
- ・ニーズを把握して見直す。
- ・中山間地域だからこそ頼みやすい。
- ・近所の情報は把握している。
- ・「こんな人が登録しています」が分かるようにする。
- ・生活支援に特化した山いき隊を設ける。いい意味で第三者。
- ・自分の得意分野を活かせるようにする。
- ・ふれあいセンターに協力してもらう。
- ・ふれあいセンターの広報紙がきっかけになる。
- ・地域の中でつなぎ役が出来れば良い。
- ・サロンなどからの声掛けがきっかけ。
- ・情報の中から自分が出来そうな活動を選択。
- ・コーディネーターによるマッチングが出来ればよい。

テーマ3 「住民が地域に関心を持ってくれ、地域の交流につながるきっかけとなる広報紙にするためには？」

- ・現場で生の声を聞く。(熊：子どもの声)
- ・ポジティブな意見が大事。
- ・(下阿多古) これから発行。編集委員会を組織。内容の区分けをどうするか？
- ・(竜川) 子どもが参加できる活動。家族ぐるみ。外に出た子どもも来る。
- ・若者の参加。
- ・LINEの活用。
- ・若い人へのアピール。活動を知らないのではないか。
親も子も見るとネットの活用 (LINEグループ)
- ・いろいろな世代の内容。
- ・興味のある内容 (テーマ)
誰を対象に？発行の回数、部数。
- ・カラー、ページ数→予算による。
作成スタッフの人数。中学生などの参画もあり。
- ・広報紙の位置づけ。地区社協、地区部会など。
誰が作るのか、情報の集め方。いろいろな団体の関わり。

- 若い世代の関わり。行事に参加できなかった人に向けて。
・広報紙づくりに関する研修も必要。

4 その他
事業などの紹介

5 閉会



5 今後の見通し
必要な対応

今回はそれぞれの成果物を共有する中で、出てきた課題別テーマについて地区を跨いで意見交換を行った。今後はこのような機会を通じて考え方が広がり地域ごとの取り組みに活かされるように支援していく必要がある。